opusdei.org

神のいつくしみの秘跡:ゆるしの秘跡に ついて(I) 罪人

フランシスコ・ルナ著(新田 壮一郎訳) 『神のいつくしみ の秘跡:ゆるしの秘跡につい て』より

2024/07/02

罪人

自己愛。わたしたちが自分を実際以上にたいした人物であるかのように信じ込ませるのは、自己愛のなす業

です。大勢の人々が自分を買い被り、実際以上に知的で強く美し、いいます。もちろんい慎るいいます。もちろんでいますが邪魔をして、自分の思すといいではいないとはしないでは分かっていないと思っていないというです。

こういう振舞いは、たいてい笑って すませられることですが、主とのお 付き合いに関する限り、決定的な影 響を与えることがあります。このように浅薄な物の見方を続けていると、自分の過失をごまかすようになり、それによって乗り越えることのできない壁を作り、主に近づいて親しく語り合うことがむつかしくなるからです。

『カトリック教会のカテキズム』 は、ゆるしの秘跡について説明する に当り、まず心からの回心、内的 に当りを求めています。「内的 を求めていますを根本の根本 とは、生活全体の根本 り心を を絶ち、悪から遠ざかります。 を絶ち、悪することです。 に、神のあわれる を発きして、生き の恵の まり、とを伴う の恵の という 望みと のです」 (1431番)。

この悔い改め(痛悔)はゆるしの秘跡を効果的に受けるために欠かすことのできない部分です。この内的悔

い改めがなければ、罪を告白することもほとんど無益になります。ですから、謙遜に罪を認めることが大切になります。福音書に現われるファリサイ人のようにはなりたくありません。

「二人の人が祈るために神殿に上っ た。一人はファリサイ派の人で、も う一人は徴税人だった。ファリサイ 派の人は立って、心の中でこのよう に祈った。『神様、わたしは、ほか の人たちのように、奪い取る者、不 正な者、姦通を犯す者でなく、ま た、この徴税人のような者でもない ことを感謝します。わたしは、週に 二度断食し、全収入の十分の一を捧 げています』。ところが、徴税人は 遠くに立って、目を天に上げようと もせず、胸を打ちながら言った。 『神様、罪人の私を憐れんでくださ

『神様、罪人の私を憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれ

でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(ルカ18・9~13)。主の言葉を注意して読んでみると、はっと思い当たるのではありませんか。わたしたちはあのファリサイ人によく似ているのではないでしょうか。

超自然の生活を自分に都合の良いよ うに解釈し、それに見合った生活が 一応は出来ているので、自分はなか なかの善人であると思い込んでいる のではないでしょうか。福音書のた とえに登場するファリサイ人は、一 見したところ立派な振舞いをしてい ます。しかし、大切なことを忘れて いました。神を愛するとは施し物を し、隣人の所有物を尊重し、断食を することだけではないはずです。徴 税人は、ファリサイ人より多くの罪 を犯したでしょう。しかし、それに もかかわらず、赦されて家に帰りま した。自分の罪を謙遜に認め、赦し を願ったからです。

主は、このたとえを使って何を教え ようとしておられるのでしょう。 ファリサイ人の言ったことも、徴税 人の言ったことも、どちらも本当で はなかったのでしょうか。いずれの 場合も、言っていることに嘘はあり ません。しかし、ファリサイ人の場 合は、真実の半分しか述べなかった のです。自分の良いところばかりを 見ていました。しかも、イエス・キ リストの教えに照らして自分の徳を 評価する代わりに、自分の利己心が 作りだした基準に合せて他人と比較 したのです。自らの罪の赦しを乞 い、心を神にささげて、初めて正し い者とされるという事実を忘れてし まったのです。

ファリサイ人は神を愛していなかったと言えます。自分自身を愛し、自分の徳を誇っていたのです。他人を軽蔑し、それが最もひどい罪である事に気付かなかったのです。隣人の持物や隣人の妻を尊敬していたの

で、盗み、姦通などの罪の赦しを乞 う必要はなく、その点では、善人で あり、良心の呵責もありません。し かし、徴税人を蔑視したことについ てはそうはいきません。この点で は、主とは似ても似つかないからで す。神は徴税人をお赦しになりまし たが、ファリサイ人は徴税人を軽蔑 しました。隣人愛に欠けていたとい う点で赦しを乞わなければならな かったはずです。しかし、自己愛が 徐方もなく大きいために、一番大切 なことを忘れてしまったのです。何 ものにもまして神を愛し、自分を愛 するごとく隣人をも愛する義務があ ります。この点で彼はあやまちを犯 しました。心の盲目という原因も あったでしょう。善い事をしていた にもかかわらず、罪人であることが 高慢さのゆえに分からなかったので す。掟の大部分は果たしていました が、隣人愛については掟を守ってい ません。ファリサイ人の罪は、罪が ないと思った点にあります。自己の

過ちを認めなかったがために、赦し も乞わず、神殿を訪れた時と同じ状 態で神殿を後にしたのでした。

高慢や自己愛あるいは不誠実が原因となって、なぜ、どこに、痛悔すべきことがあるのかが分からなくなったのです。だからこそ、あのファリサイ人は良心に痛みを感じることもなく、平然としていられたのでしょう。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/itsukushimi-no-hiseki1/(2025/12/13)